

## 『社会連帯経済と都市』を読む

6日に開催された宮本背広ゼミ・京都研究会は、『社会連帯経済と都市 フランス・リールの挑戦』2021年を取りあげた。宮本憲一先生や執筆者をはじめ、多くの研究者・ゼミ生がリアル参加した。私は体調の関係で残念ながらズームで視聴した。まずは、本書冒頭から紹介しよう。

本書は、フランスの北東部に位置するリール地域における社会連帯経済(ESS)の実践を詳細に検討することで、通常考えられがちなものとは異なるもう一つの経済の可能性を探り、都市・地域経済の再編に向けた新たな展望を得ることを目的としている。

ESSは日本ではまだ馴染みの薄い言葉であり、具体的なイメージが湧きにくいかもしれない。簡単に表現するなら、それは「通常の」経済のように私的利益の追求ではなく、万人にアクセス可能な社会的有用性(社会的効用)を追求することに主眼を置く経済である。その意味で、協同組合やNPOなどの非営利組織や、ソーシャル・ビジネスやソーシャル・イノベーションを主軸とする活動からなるセクターをイメージするとわかりやすいだろう。ESSは、現代資本主義と同様に個人の自由・自律・特異性を重視しながらも、互酬的連帯や公正といった価値を忘却することなく、コモンの維持・拡大に寄与する経済を目指している。持続可能な社会に向けて「脱成長」をキーワードに社会変革を展望する立場に比べて、ESSは社会のハイブリッドな編成と現実的なローカルでの実践に重きを置いている。

研究会では、まず編者の立見淳哉さんが、上述の本書エッセンスを詳細に説明した。次いで、4章を担当した大田康博さんが、社会連帯経済(ESS)の具体的な事例を紹介。ESS企業の特徴と実態を理解するには、上場株式会社と欧米の社会的企業の特徴を確認したうえで、近年のフランスにおけるESS関連の企業法の展開を検討する必要があるとする。そして、SCIC(集合的利益のための協同組合会社)のenercoopなどの事例を現地調査をもとに報告した。

質疑では多くの論点が提起されたが、私も次の2点にしぼりコメントした。一つは、ESS企業が資本主義の株式会社に代わり得るものか、社会のハイブリッドな編成とESSの評価について、この間の背広ゼミでの論点と関わらせて質問した。もう一つは、再エネ分野のenercoopの市場占有率と今後の見通しについて。

宮本先生はESSは刺激的な問題提起で、わが国で1995年の阪神大震災以降に注目されてきたが、あまり伸びないのはなぜか。なぜリールなのか、2014年ESS関連法の政治経済的背景、都市計画への住民参加、ESSへの株式会社の参入などについて問題を投げかけた。ズーム参加ではあったが、多くの示唆が得られた研究会であった。



(2023年8月8日)